

平成 28 年度新潟県大学生の力を活かした集落活性化事業

粟島しおかぜ地域共生プログラムの実践研究

高齢者のお手伝いプログラムを軸とした観光・産品開発・首都圏連携活動の創出

事業実施報告書



平成 29 年 3 月

大正大学地域創生学部地域創生学科 出川真也研究室

目次

- I. 地域とプロジェクトの概要ー前年度事業経過を踏まえてー・・・4
 - 1. 栗島浦村について・・・4
 - 2. 事業全体（H27～28年度）の概要・・・4
 - 3. 前年度（27年度）事業の概要と課題・・・5

- II. 本年度（28年度）事業内容と結果ーお手伝いプログラム試行実践を中心にー・・・7
 - 1. 事業目的ー試行研究における2つの視点ー・・・7
 - 2. 事業経過・・・7
 - 3. 栗島における試行研究内容と結果・・・8
 - 4. 首都圏における発信活動ー「離島キッチン」でのイベントを中心にー・・・15
 - 5. 事業結果の考察・・・20

- III. 総括と提案ーお手伝いプログラムを軸とする多世代協働コミュニティ創出ー・・・25
 - 1. 提案概要ー栗島の高齢者と子ども達をつなぐ学習プログラムの構築と実践ー・・・25
 - 2. 実施方針・・・26
 - 3. 期待される効果・・・26
 - 4. おわりに・・・27

- （資料編）・・・29
 - ①お手伝いパンフレット
 - ②畑仕事補助教材 服装及び畑ごとの情報
 - ③離島キッチンチラシ
 - ④離島キッチンワークショップでの考案プラン案
 - ⑤中間報告・最終報告プレゼン資料

I. 地域とプロジェクトの概要－前年度事業経過を踏まえて－

1. 粟島浦村について

粟島浦村内浦集落・釜谷集落は、人口350人余り、日本海に浮かぶ周囲20kmほどの離島である。本土側からは、新潟県最北端の市である村上市より汽船で一時間半ほどの場所に位置する。澄んだ海と豊富な海産資源、そしてかつては野生馬を産んだ里山の恵みが魅力だ。西海岸は日本海の荒波に洗われた岩礁地帯で、まさに絶景と呼ぶにふさわしい風光明媚な景観が広がる。

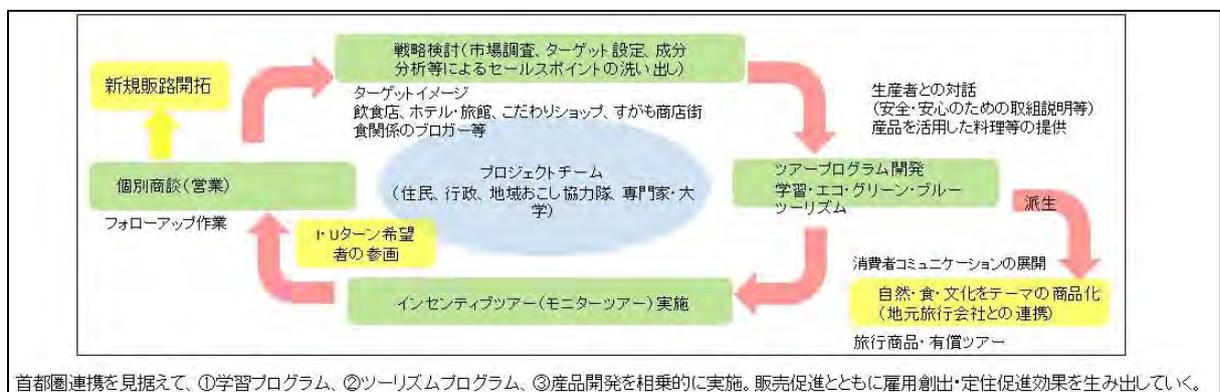
近年、過疎・少子高齢化が進んでおり島の人口は最盛期の半以下となっている。若手の人手不足から島環境の劣化や里海における生業の低迷などが危惧されている。そのため、村では島外の子ども達を島の学校に受け入れる「しおかぜ留学」や島への移住促進につなげる観光事業など、島外の人々との連携協働による人づくりと島の活性化を模索し始めている。そのため島民と島外者が協力して、島作りのために共に取組めるもの（こと）の掘り起こしが必要であり、島外に暮らす地元出身者や島暮らしに興味をもつ若者等協力した地域おこしによる地域経済の活性化が求められている。

2. 事業全体（H27～28年度）の概要

（1）プロジェクトの概要

人口減少が著しい社会的条件の中、粟島においては離島の自然・文化的特性をいかながら島内住民だけではなく島外者とも協働連携しながら取組んでいける新たな方策が必要不可欠となっている。

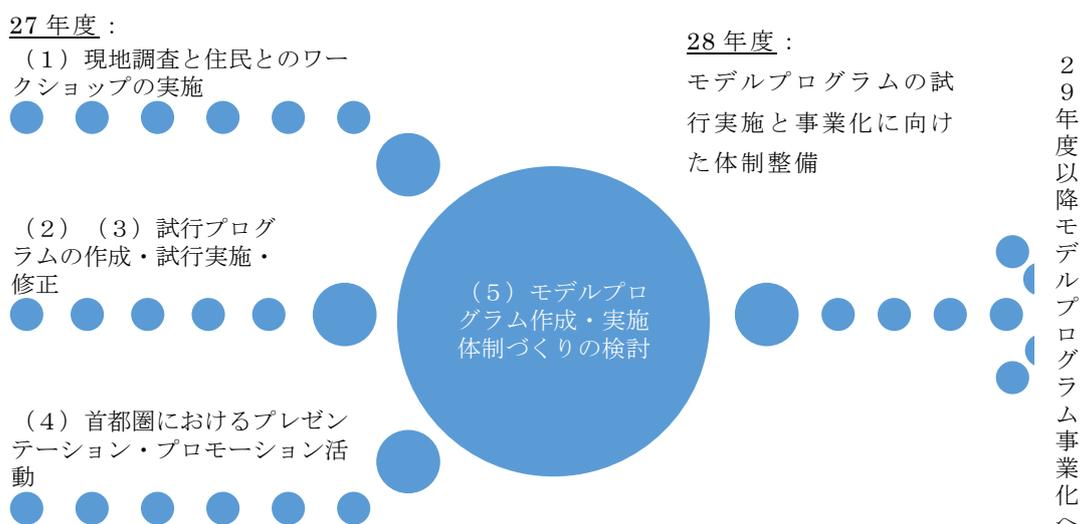
本事業では粟島浦村の地域に根ざした自然・文化・人材資源を活用し、島民とともに島外者が取組むことができる島づくりプログラムを作成することを軸に取り組みを進める（下図）。



プログラム作成のための調査、プログラムの試行、事業化に向けた体制整備検討活動を通じて、既存団体を含む活動体の組織強化を図る。あわせて首都圏連携を見据えた活動展開策を検討し、首都圏との連携を視野に入れた島内外の人材がかかわることができる新たな生業創出と、定住促進に向けたロードマップとビジョンを明確にしていく。

3. 前年度（27年度）事業の概要と課題

27年度は、プログラム作成のために島民と共に、①地域調査と調査に基づいた試行プログラムの作成、②プログラムの試行、③首都圏でのプレゼン・プロモーション活動、④事業化に向けた体制整備検討を行った（下図参照）。



以上の結果を踏まえて、島内外の参加者が協働できるものとして、主に島の高齢者が担ってきた里山・農業、手仕事（民具づくり）、郷土料理、共同作業・年中行事に光を当て、これらを構成要素とした学習観光プログラム「あわしまおじいちゃん・おばあちゃんとの出会いとお手伝い」を構想し取りまとめた（作成したお手伝いプログラムパンフレットイメージは次頁及び報告書末資料参照）。島内の様々な身近な資源を島外者との交流の中で保全・活用していくことを構想したものとなっている。

あわしま

おじいちゃん・おばあちゃんとの 出会いと島のお手伝い

お手伝いプログラムの概要

要旨の美しい海は、里山や畑で育てられた野菜や果物の風味に
よって育まれています。まさに夏島の青い空と、おばあちゃんらは
長年わたって里山の手入れを行い海を眺めて、この美しい海を新
しうたてています。

このツアーは、島外からの来訪者と島の人のつながりとして、里山・畑・共
同作業・各種手仕事・伝統行事の参加や島伝統の暮らしのお手伝い
に取組むことを通じて、心と自然を元気にしていくプログラムです。

要旨とは
要旨浦村は人口350人余り、日本海に面した面積約20㎢ほどの離島の
村です。本土側からは新潟県北越前市である村上市と車で約1時
間半ほどの位置にあり、豊かな海と豊かな山を資源として、かつては野
生馬を畜んだ里山の島が魅力です。西海は日本海の元波に洗われ
た岩礁地帯となり、さまざまな魚種とゆたかにふわり、風光明媚な景
観が広がっています。

<1日目>		<2日目>	
昼	要旨港到着 昼食とレクチャー	午前	プログラム① 里山・畑 共同作業から季節に応じ て選択 ※雨天時はテゴ編み作り
午後	プログラム② 里山・畑 共同作業から季節に応じ て選択 ※雨天時はテゴ編み作り	昼	昼食・出発準備
夕	プログラム③ 郷土料理教室・夕食	午後	要旨港出港

持ち物 服装等
野外活動に適した服装(長袖長ズボン)、エプロン(郷土料理教室)
帽子・手ぬぐい・入浴用具等

東京から岩船港まで

村上駅から岩船港まで

バス
村上駅 約20分 290円
岩船上大町 徒歩10分 岩船港

乗り合いタクシー ※要予約
15分 中学生以上700円
小学生350円(未就学児無料)
乗車30分前までに予約
予約先: 要旨汽船株式会社 (tel0254-55-2131)

フェリー
普通船「フェリー要旨」 新高速船「Fawline ぎらら」
※高速船は要予約
予約・問い合わせ
観光案内所 tel0254-55-2146 受付 8:30-17:00
当日の問い合わせ先
要旨汽船
岩船 tel0254-56-7792 受付 7:30-17:00

本プログラムに関するご相談は、
船島と郡市を結ぶ地域づくり学習研究会
(元正太学地域構想研究所 出川)まで。
tel 03-5394-3048
fax 03-5394-3055
mail s_degawa@mail.tais.ac.jp

島のおばあちゃん・おじいちゃんお手伝いプログラム

①春: 畑仕事のお手伝い 3~10月
3月~5月種まき・6月~10月収穫
葉物類の収穫と、じゃがいも・えんどう・玉ねぎ・金時豆・かぼちゃ・さつまいも・長芋などの栽培のお手伝い。
島のお母さんたちと一緒に畑仕事をして、採れた食材を使った伝統料理に観しむことができます。

②春: ワカメ採り・浜清掃・山道作り 3~4月
集落の大切な生業の一つワカメ採り。集落共同でワカメの収穫を行い、部位に分け、干していきます。作業後の交流会でいただく生ワカメのしゃぶしゃぶは絶品です。
また、浜清掃や大工仕事が必要な山道づくりなど、島の暮らしに欠かせない作業のお手伝いをします。

③春: 山菜採りのお手伝い 3月~5月
里山を歩いて山菜の収穫、そして塩漬け・瓶詰めなどの加工のお手伝い。山菜は月によって採れるものが違い、様々な収穫物を味わうことができます。
また、作った料理は食べたり、お持ち帰りしたりできます。

④春・秋・冬: 郷土料理教室
山仕事や畑仕事の後は、その恵みを料理に。収穫したばかりの山菜や野菜を、要旨の海の幸と合わせていただくプログラムです。島のおばあちゃんたちから郷土料理、手料理を学び、一緒に試食をします。

⑤秋: 畑仕事のお手伝い 10~11月
大根・かぶ・大豆などの収穫と、にんにく・葉っぱの種入れ、キャベツの種付けをお手伝い。
来春に向けて作物を植え付けたり、島の冬の畑について体験することができます。また、冬ならではの郷土料理を楽しむこともできます。

⑥秋: 磯道普請のお手伝い 11月
冬の岩海苔つみのための道づくりのお手伝い。海の裏手の山にクワなどを使って通り道を作り、冬でも海におられるようになります。また、磯道を使って収穫できる岩海苔・その他海産物を楽めます。

⑦秋: 里山再生のお手伝い 9~11月
竹、杉、榎木林の手入れをお手伝い。竹の伐採、杉・榎木林での薪取りをした後、竹灯笼やおもちや、ストーブ・ボイラー用の薪を作ります。作った竹のおもちを持ち帰ることができます。

⑧冬: テゴ編みのお手伝い 12~2月
紐、カツラなどの植物で、ポシェットバッグのような万能物入れを編んで作るお手伝い。島のお母さんたちによく使われているテゴは、山菜採りや海産採りにも役に立ち、カバンのように使うこともできます。
※雨天時のプログラムにもなります。

島外者もお手伝いできる島行事
島には100近い年中行事が存在していました。その中から島外の方も一緒に取組める年中行事を5つ厳選。お手伝いプログラムと共に島人との交流を深めましょう。

- ① 乗り初め漁神楽(1月11日)
漁師の祭り
- ② 七夕(8月6日)
舟を流す
- ③ 盆踊り(8月13-14日)
楽しくおどる。事前練習参加者は太鼓・つたいも可能
- ④ 釜谷六所神社祭礼(10月8日)
竹灯笼作り
- ⑤ 八所神社祭礼(10月26-27日)
灯笼やのぼりを立てたり、神輿を担ぐ

Ⅱ. 本年度（28年度）事業内容と結果－お手伝いプログラム試行実践を中心に－

1. 事業目的－試行研究における2つの視点－

平成27年度は、首都圏連携を見据えた活動展開策を検討し、首都圏との連携を視野に入れた島内外の人材がかかわることができる新たな生業創出と、定住促進に向けたヴィジョンについて模索・検討した。その結果、島の里山・畑などの身近な資源、お手伝いプログラムを構想した。本年度は、構想したプログラムを試行実践し、実際に島民・島外者が取組める事業構築を図ることが目的である。

実施に当たっては、次の2つの視点を重視した。第1に、おじいちゃんとおばあちゃんの魅力と島の底力を引き出すための視点。島外者が島や島に生きる人々を知っていること、あるいは知りたいと思うことがお手伝いプログラムの基盤となるからである。目の前の相手が大切な存在だということにより、その相手の想いや魅力を汲むことができる。この Respect 〈尊敬〉の感情をプログラムの中でいかに育ていけるかということが試行実践のポイントとなる。

第2に、島内・島外者が一緒にかかわりながら共に学び・育つという視点である。ここでは、お手伝いプログラムの実施を通じて、島外者の学びや面白さ、尊敬の感情を湧出させていくとともに、それを島民も感じるようにすることで、両者が自己効力感や自尊心を育ていくことがポイントとなる。これは、短期的な観光では生じることはない。粟島に存在する自然文化人物資源の活用であり、いわゆる粟島の「島時間」の中でこそ培われるものではないかと考えられる。

以上の2視点を重視しながら、お手伝いプログラムの試行実践を軸とした調査研究を行った。また、試行実践を踏まえた首都圏での粟島のPR活動を実施した。

2. 事業経過

28年度の実践研究スケジュールは以下のとおり。

(1) 粟島浦村における試行研究

1) 第1回試行研究（粟島浦村）

- 1日目 7月9日（土） 地域調査（地元学講習会）
自然体験学校スタッフと調査ノウハウを共有
- 2日目 7月10日（日） 地域調査（地元学調査）の取りまとめ
自然体験学校スタッフをモニターとして調査体験。

2) 第2回試行研究（粟島浦村）

- 1日目 9月3日（土） 島内行事（運動会）の見学
打合せ（自然体験学校・全体行程等確認）
- 2日目 9月4日（日） 里山（竹林）保全整備活動・海での体験活動
竹を使った流しそうめん 子ども達との交流

- 3日目 9月5日(月) 子どもたちと地元学習会
釜谷・内浦量集落でそれぞれ現地調査・発表
- 4日目 9月6日(火) おばあちゃん畑と食
季節の畑仕事の実施Ⅰ
郷土料理調査・試食
- 5日目 9月7日(水) 島内巡検・観光
- 6日目 9月8日(木) 防災訓練参加
夜、有志にてタコ釣り活動(2杯捕獲)
名古屋大学院生(野鳥研究者と交流)
- 7日目 9月9日(金) 伝統的な竹林作業・記録作業
テゴ編み体験・記録調査
- 8日目 9月10日(土) 11:10 粟島発
- 3) 第3回試行研究(粟島浦村)
- 1日目 11月12日(土) 畑作業の取材・調査
- 2日目 11月13日(日) 村資料館での情報収集
村役場にて今後の活動についての意見交換

(2) 首都圏における発信活動(東京都巣鴨・池袋・神楽坂)

1) 首都圏生涯学習施設での発信活動

10月29日(土)・30日(日)

豊島区生涯学習施設みらい館大明文化祭での展示・発表

2) 大学祭における発信活動

11月5日(土)・6日(日)

大正大学学園祭「鴨台祭」での報告・発表

3) 首都圏飲食店を活用した発信活動

2月25日(土)

神楽坂「離島キッチン」でのトーク&ワークショップイベントの実施

3. 粟島における試行研究内容と結果

(1) 「お手伝いプログラム」試行実施の背景

粟島浦村では、これまで地域振興策として島外者の受け入れを前提とした観光分野や、周辺海域を利用した漁業分野(海資源の活用)を主眼に置いてきた。

私たちの前年度からの取り組みでは、この観光・漁業の基盤となる島周辺の海洋環境は、島の里山・農地の健全な営みとつながっているものであることがわかってきた。しかし、島の里山・農地の担い手は高齢者となっており、高齢化と人手不足でその将来像が危惧されている。こうした課題に対して、「お手伝いプログ

ラム」では、島の高齢者が担う里山や農業の知恵技術の継承と人手不足の解消に寄与することを狙っている。

構想した複数のお手伝いプログラムから以下の3プログラムを選択し、試行実施した。

- 1) おじいちゃんと里山（竹林）保全整備プログラム
- 2) おばあちゃんの畑仕事と食
- 3) 「島の子どもたちとの地元学」

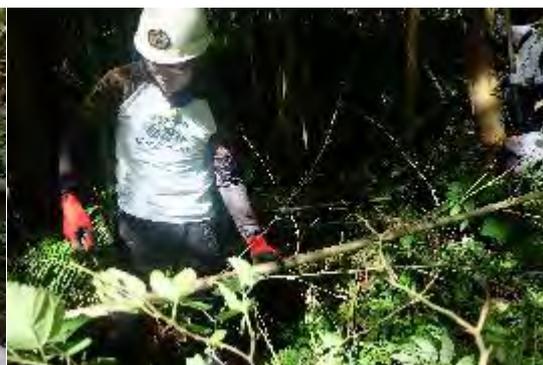
以下に詳述する。

1) おじいちゃんと里山（竹林）保全整備プログラム

粟島の里山では、竹林の荒廃が問題となっている。かつて良質な竹材を産出していた歴史があった。しかし、竹林管理・活用の伝統や技術は、産業構造の変化、人口の減少、高齢化等が相まって、消滅しようとしている現状となっている。本事業の中でどのように竹林管理していけばよいか詳しい方〈男性高齢者〉がご健在であることが分かった。「お手伝いプログラム」を通して、整備保全のためのお手伝い試行を行うとともに、伝統的な竹林整備方法について確認し記録した。

①高齢者の担う知恵・技術による伝統的な竹林整備試行実践

かつて島の竹林産業に携わった経験のあるおじいちゃんお二方に伝統的な竹林整備について教わった。粟島で受け継がれてきた伝統的な竹林整備を知っている方々であり、的確で力強いナタさばきで竹を伐採していた。竹林の現場でてきばきと指示を出していただき、切った後の竹の置きかたや倒す向き、理想的な竹林としていくためにどの竹を残していくかなどの具体的な指導をいただいた。





今回の活動では、参加した学生たちも果敢に竹に向き合い、最後のほうにはナタもノコギリも上手に使いこなすことができた。最初は鬱蒼としていた竹やぶが自然光の入る竹やぶに変わったのを実感したときは達成感があった。また、お二方からは好意的な褒め言葉もあった。今回整備したことにより、来年以降はタケノコがとれるかもしれないという言葉には皆‘やりがい’を感じた。栗島では、畑をしおかぜから守るため、伐採竹を材にして竹垣を利用しているところも見受けられる。新しい活用方法とともに伝統的な活用方法も改めて見直して、いかに伐採した竹の有効利用を図っていくか検討することが今後求められている。

②あわしま自然体験学校との協働による竹林整備プログラムの試行実施



本年度設立された「あわしま自然体験学校」では『バンブー体験』を体験プログラムに設定しようとしている。体験を通して、自然環境について考え、昔なが

らの工夫や技術についても学ぶことを目標としている。また到達課題として、自身の創意工夫する心を養うことを掲げている。

竹林整備は a. 伐採 b. 運び出し c. 余分な葉を落とす d. 加工という流れで行う。

a. 伐採では、最初手にしたノコギリの使い方が分からず苦戦したが、現地の方に教えてもらうなかで、比較的短時間でコツをつかむことができた。皆で声を掛け合いながら周囲の安全を確認し、竹を倒していく。

b. 運び出しでは、山の斜面から竹を引っ張り出し、トラックへ積載していく。伐採し切断した各3～4メートルほどの長さの竹を一人で引っ張り出し運ぶことは力も体力もいる本来つらい作業である。しかしこの作業を皆で行う中で、運動会の“竹取合戦”を彷彿とさせる楽しく感じることができるよう演出することが可能である。

c. 余分な葉を落とすという作業では、学生たちの多くが初めてナタを使った。指導に当たっていただいたのは島内の女性だが、ナタなどの道具の使い方は、自身の母や嫁ぎ先のお姑さんに教わったとのこと。周囲に十分に注意し、安全に使用しなければならないが、適切な使い方をすれば、腕力に乏しい女子学生でも簡易に葉を切ったり、適切な大きさにわることができた。

d. 加工では、小刀とナタを利用し、伐採竹で箸コップお皿などのオリジナルの食器を作った。作業を行っている時、牧場に遊びに来ていた数人の小学生たちが「何しているの？」と声をかけてきた。この小学生たちも上手な小刀さばきで箸を作り、丁寧にヤスリで竹をみがいた。また、大学生のなかには余った竹で竹トンボをつくり小学生に慕われる者もいた。なかには、自分の自転車の前かごに竹をさして帰る子もいた。現場の工夫で日曜大工的に様々な展開が可能であることが確認された。

以上の竹林作業の後は、作成したオリジナル食器や伐採竹で流しそうめんを行った。食器づくりを手伝ってくれた子たちの他にも島に住む小学生が食べに来てくれた。自分から流し役を立候補したりお手伝いをしたり、下の子の面倒をよく見ている子が多く、楽しい手作りイベントとなった。



粟島自然体験学校と連携したバンブー体験の試行実践の結果、竹林作業を行う以外にも、周辺フィールドでの活動やクラフトを利用した食イベントなどを設定することが可能であることが分かった。こうした一連の体験を通じて竹の手入れ

作業を楽しみながらその意義を理解することができるのではないか。また、初めての人たちや普段話さない人と一緒に具体的な作業を行うことは、コミュニケーションを深め、新たな発見、尊敬の醸成、参加者相互及び自分自身の理解促進につながるものと実感された。

2) おばあちゃんの畑仕事と食

島内の畑作業は小規模、多品種生産という特徴をもっている。そして高齢女性が主な担い手となっている。平成 27 年度のヒアリングでは、高度な機械での作業ではないため、島外者も参加できるものが数多くあることが分かった。今年度は、おばあちゃん 1 人のもとに 2 人の学生が赴き、お手伝いプログラムが運営可能か検証することとした。9 月、11 月の期間を変えて実施し、計 5 組のご家庭の協力を得て実施した。そのうち実施モデルとして 1 組について以下の通り詳述する。

①食のお手伝い

おばあちゃんの生活時間に合わせて、5時に起床。5時半には、内浦集落にあるハイシーズンのみ民宿を行っているおばあちゃんのお宅を訪問した。旦那さんは島外の市内の病院に入院し、子どもや孫たちも市内のほうに暮らしているとのこと。にこやかな笑顔と優しい物言いに遠くにすむ祖父母の家に訪れたかのような感覚を持った。

天候が荒れていたため、朝の畑仕事は食事をとってからとなった。朝ごはんのお手伝いを申し出たが 2 度ほど断られた。だが、簡単な食器出しを頼まれてからは、食材を切ったり混ぜたりするお手伝いをさせていただいた。前日に畑で採ってきてくださったお野菜をたくさん使用し、豪勢なご飯が完成した。民宿をやっているだけあって、レポート



りに富んだ品々のレシピ本の料理より格段に美味しかった。食事をする中では、お孫さんのお話や島のことについてお話しした。

②畑のお手伝い

おばあちゃんは大の畑好きで、痛い足も畑にたつと痛くなくなるそうだ。実際よく手入れがされた大きな畑を家の近くに 1 か所、車でしか行くことができない山の上に 2 か所も所有している。移動に使う軽トラックを運転するための免許も 50 歳になってから一発合格で取得したとのこと。



私たちは、おばあちゃんに耕運機の使い方や熟している野菜たちの判別など一から教わった。そして畑の整備や種まきを一緒に行った。おばあちゃんは、教え切れないほどの果物から野菜まで幅広く育てている。各々の収穫時期や数年先の畑の敷地の使い方が、年間スケジュールで頭の中に完璧に入っていることには驚かされる。また、毎日の収穫を怠るとすぐ大きくなりすぎてしまう果物や野菜を私たちは適宜収穫した。一人で食べるには、あまりにも多いため、普段は人におすそ分けしたり、遠くに住む子どもや孫に送るとのこと。持ち帰った野菜で昼はかぼちゃのお餅などを教わるなど楽しいひと時を過ごした。



総じていうと、島のおばあちゃんは、学生の私たち以上にキビキビと動くことができるので、今回の試行実践では、「お手伝いプログラム」というよりは「体験プログラム」と表現したほうが正しいと感じた。また、収穫した多くの野菜たちをおすそ分けしてくださったり、私たちのために作業の世話をしてくださったりするなど、かえっておばあちゃんの負担が大きくなってしまいう可能性もあると感

じられた。一方で、おばあちゃん側からの要望としては、お手伝い要素として、野菜運び・背の高い果物の保護カバーつけ・風で倒れた野菜を立てること、きめ細かな草取り作業など、季節ごと営農段階ごとに具体的に挙げてもらうことができた。長期的で具体的な視点に立ってお手伝い要素を検討していくことで、畑仕事に素人の島外者でもその力を活かしていく可能性をみつけることができたといえる。

また、おばあちゃんからは「たのしかった」「ありがとう」「またおいで」という言葉をかけていただいた。学生たちの中には、普段早起きも虫も得意ではないし、まして畑仕事は疲れるし大変そうという印象を抱いていた者もある。しかし、最初は上手にできなかつた耕運機を上手に使えるようになって褒めてもらったり、この日植えた種が3日後に芽をだしているのを確認したとき、誇らしい気持ちを感じたようである。取り組みの中に自己効力感を感じさせ自尊心を高めさせる力があることを示しているといえるだろう。



3) 島の子どもたちとの地元学—

今年度、島に新たに設立された「あわしま自然体験学校」は、島の自然・文化を活かした学習資源を観光に活用しようとプログラム開発に取り組んでいる。7月の第1回の試行研究では、あわしま自然体験学校のスタッフに対して、島資源の再発見活用策を考えるための手法を学ぶという趣旨で、前年度に取り組んだ地元学を自然体験学校のスタッフ研修として行った。さらに9月訪問の際には、島



に住む子どもたちに島の魅力を見つめ直し知ってもらうために実施してもらいたいという村役場と自然体験学校からの要望で、子どもたちとともに地元学を実施した。

①あわしま自然体験学校との地元学研修会（7月）

内浦地区において、地元の方や自然体験学校のスタッフと地元学を行う中で、多くの守り神、地元で見かけない多様なものが実っている畑、民家の軒先につるされた芸術的にかわいらしい玉ねぎ、小学生の時に遊んだ路地を彷彿とさせる狭い歩道などを見させてもらい、多くの不思議さや面白さを感じた。一緒に歩いている地元の方が、小学生を見かけると名を呼びかけながら、「仲直りしたんか？」と聞いたりするなど、島のコミュニケーションや近所づきあいの風景の一旦に触れることができた体験となった。

②子どもたちとの地元学（9月）

第2回目試行研究（9月訪問）では、内浦地区・釜谷地区の両地区において島の小学生と地元学を行った。午前中は内浦2チーム釜谷2チームに分かれて地元学を行い、昼食後、取材カードの整理を行い、「興味を持ったカード」を選び発表しあった。意欲的に取り組んだチームもあったが、一方的で子どもたちのなかには「なんで(地元学)するのかわからない」「つまらない」「特に歩いたところでここ〈栗島〉にはなにもない」という声も聞かれた。7月の内浦での地元学とのギャップに最初驚かされたが、子どもたちの話を聞いていく中で、こうした思いがうまれる背景に子どもたちの多くが忙しいスケジュールの中で無理にこのプログラムに参加した者が多かったことを知った。

ここに、子どもたちにとってお手伝いプログラムや地元学等の地域学習活動を進めていく際の留意点が垣間見られる。島の子どもたちはそれらを遊び・知り尽くしてしまったから栗島がつまらない、なにもないと評価したのではなく、詰め込みの傾向があるプログラムに対する反動ではないかと考えられる。都会から訪問した学生たちは、島に来てから、天の川を肉眼で見ることができたことに感動し、太陽が海に少しずつ沈んでいくことに夕食の時間を忘れて見入ったり、自分のペースでのんびりと過ごすといったいわゆる「あわしま時間」の魅力を満喫してきた。こうしたゆったりした幅を持ったプログラムの実施環境が特に島の子どもたちには求められていると考えられる。

4. 首都圏における発信活動-「離島キッチン」でのイベントを中心に-

今年度は、「お手伝いプログラム」の試行実践とともに、首都圏と結ぶ活動にも注力し、豊島区生涯学習施設みらい館大明や大正大学学園祭「鴨台祭」での研究報告や展示発表を行った。

さらに、島根県海士町観光協会が運営する「離島キッチン」と共同で『【離島研究 × 離島キッチン】～大学生とめぐる『粟島』2時間ランチ会～』を開催。学生による研究発表、移住者による体験談、粟島の料理による交流会を通し、粟島や島・地方の生活の魅力を探った。以下に詳述する。

(1) イベント概要

1) 日時・場所 平成29年2月25日(土) 東京神楽坂・離島キッチンにて

2) 実施体制

総括責任者 幅野裕敬(大正大学人間学部教育人間学科3年)

共同責任者 兵頭衣織(大正大学心理・社会学部臨床心理学科2年)

サポーター 高橋咲紀(大正大学文学部歴史学科3年)

サポーター 本多 龍(大正大学心理・社会学部臨床心理学科2年)

顧問 出川真也(大正大学地域創生学部専任講師)

3) 実施内容

① 研究発表

研究学生による調査で見つけた「粟島の魅力」、離島と都市を結ぶ「お手伝い活動」の紹介を実施。

② ワークショップ

隣席でグループを作成し、粟島体験カードを活用して、1泊2日の体験プランを作成。その後、グループごとに発表してもらい全体で共有。

③ トークセッション

Iターン者による「おむすびの家」のご紹介、粟島に移住した理由及び起業した理由をお話頂いた。

④ 県内大学である敬和学園大学からアマドコロ茶について紹介

⑤ 特別粟島ランチ御膳でランチ交流

⑥ アンケート記入(本報告書末に掲載)

(2) イベント結果

1) 研究発表

お手伝いプログラムをはじめとして、粟島での調査活動・体験活動の発表を行った。参加者の方々にお手伝いプログラムに興味を持って頂くことができ、プログラムの詳細やいつから参加することができるのか等多くのご質問を頂くことができた。お手伝いプログラムに対する需要の有無を確認する良い機会となった。

2) ワークショップ

ワークショップの実施により、参加者が粟島へ実際に行くイメージ、行った際の観光イメージを作っていただくことができた。また、都市部の方々が実際にどのようなプランを組むのか見ることができ、今後の研究活動の参考にしたい。

3) トークセッション

トークセッションでは、青柳さんから島外から栗島を見た魅力と島内へ移住して感じる栗島の魅力を語って頂いた。島内・島外、両方の視点をお持ちの青柳さんにお話頂けたことで、別の視点でも栗島の魅力をお伝えすることができ、参加者の方々へ、栗島の生の魅力をお伝えすることができたと考える。

4) ランチ交流

ランチ時は、座席での交流であったが、様々な方と意見交換や情報共有をすることができた。発表ではとりあげきれなかった栗島の魅力や取組の紹介を行うことができた。料理に関しても、参加者の方からは、満足の声が多く、食材に関するエピソードを研究会学生と一緒に話すことで関心をより高めることができた。

5) イベント全体をとおして

栗島のことを知らない方や「淡島」と勘違いしていた方など、栗島についての情報を殆ど持っていない方の参加もあり、本イベントの最も大きな目的である栗島のPRという点について微力ながら栗島の魅力を都市部の方々にお伝えできたのではないかと考える。



(3) イベント来場者からの感想から

イベント来場者からは数多くのご感想をいただいた。次に紹介する。

- ・3回程度粟島に行ったことがありましたが、新たな発見があり楽しく過ごさせていただきました。
- ・タラの刺身を島で是非味わってみたい。枝豆は素朴な味で飽きずに食べられます。粟島に興味・関心のある方々がこれだけ集まったのはすごいと思いました。まだまだ様々な取り組みの可能性があると感じました。
- ・とてもまとまっていて素晴らしかったです。
- ・ワークショップをしたことで、一方的なプレゼンよりも参加者が島へ行ってみるイメージが描けたと思います。お料理も美味しかったです。
- ・粟島についていろいろ知ることが出来た。何も無いからこそある魅力を感じた。
- ・粟島のこと以外にも、その関係者の方と知り合えてよかった。
- ・粟島の郷土料理を味わうことが出来た。
- ・学生さんたちのパワーを感じました。楽しい時間でした。
- ・学生の方、島に委譲して島の発展に携わって下さっている方たちに感謝の気持ちでいっぱいです。これからもがんばって下さい。
- ・参加者とたくさん話す機会があってよかった。
- ・若い人たちのフレッシュな感性に触れて、元気が出ました。大学の時にこうした活動をするのは良い。
- ・新潟人として枝豆は冷凍だとちょっと。。最初にスケジュール説明や注意事項を入れるとか。最初の紹介がやや長い。
- ・世代を超えて粟島を話の中心に交流できてとてもよい時間でした。また、毎月の「今月の島」と出して料理を提供している離島キッチンにとっても魅力を感じました。
- ・都会の雑踏の中で生活している若者たちにとって、離島での自然な時間の触れ合いは、大変有意義で貴重だと思うし、日本には600もの離島がありますのでこの活動を広げていってもらいたいと思います。
- ・島での体験、研究発表、これからの取り組み等々大変良かったと思います。島にある眠っている物を探して下さい。
- ・島の良いところをつまみ食いしたような楽しい間隔で、またお料理もとても美味しく満足です。
- ・離島が大好きで卒業論文テーマを離島にしようと思ったこともありました。一人で行うのは自信が無く断念してしまったので、少し研究室の皆さんがうらやましいです。私的な出合いを有難う御座います。
- ・離島キッチンはもともと興味があったのでこれでよかったです。学生さんたちから生の声として、島での出来事や感じたこと紹介してもらえてよかったです。

・真鱈は癖が無く、油が乗りおいしいので、フライなどは是非商品化していただきたいです。

・粟島のじゃがいもを食べてみたいです。粟島ファンを増やしたい。

・その物を感じ、その土地を感じ、とても素敵な商品だと思いました。

(4) イベント運営学生の所感から

イベントの運営に当たった学生の所感を以下に紹介する。

①兵頭衣織

参加者は熱心に大学生の話に耳を傾けてくださり、粟島らしさを伝えることができたのではないかと感じた。

ワークショップの班では、昨年粟島に三度訪れてから大ファンになった男性、別の「あわしま」と勘違いして参加した若い女性、旅行が趣味の男女など出身地・動機が様々な方が粟島について思いを馳せることができた。【一泊二日のプラン作成】においては「二泊三日にしよう!」という話もでたり、サップ(スタンドアップサーフィン)をやってみたい・あわ島のあわにかけてバブルラン等の都会的な若者らしい意見もあった。また、プラン作りの中では「ぼんやり過ごす時間がほしいなあ」などの長期滞在を希望するかたもいた。やはり海の活動が人気で、竹などの活動は安全面の心配や時間についての質問が多く出た。気付かなかった意見や新しい視点が多くあった。

発表では、とても緊張してしまいましたが、粟島の雰囲気や島外者 - 粟島一ファンとして自身の思いを伝えることができました。ハナコさんが時間の話にふれてくださったり、アンケートにも離島と都市の比較をしてくださる方がいた。

お食事の中では、粟島の村長さんのお姉様と旦那様、お子さんが離島高校に進学している方、地域おこし協力隊を希望する女性などが美味しい食事をきっかけに粟島について活発な意見交換をしてくださった。アイランダーを知らない方がいらっしやったり、料理の作り方を教え合ったり、都会にいなながらも離島に触れたい方は多いのではないかと感じた。

たくさんの方の協力のおかげで、このような素敵な企画をつくりあげたことに感動した。また、大学生だからできる企画だなと感じた。

②本多龍

離島キッチンイベントでは、参加者は地元の常連さんから、その友人である福岡に住んでいる方、他多くの方にいらっしやっただき、多くの人に粟島の存在を知ってもらえたと感じる。活動報告の後に行ったグループワークは4班になって行った。そこでは夕焼けと星空の観賞を入れている班がほとんどで、みなロマンティックなものに興味があるのだと感じられ、夕日や星空も粟島の自然の一

部なので観光資源や自然体験プログラムの一つに十分入れることが出来ると思う。これに関連して、船の上から夕陽を見たいという意見が出ていた。今回の話し合いのテーマが自分たちで旅行の予定を考えるというものの為か、研究会の発表にあったお手伝いプログラムについて触れる人は私がお話を聞いた人の中にはいなかった。私は調査という形で粟島に行っていたので、何が島のためにどんなことに使えそう、といった視点で見ている。だがこのイベントでは参加者の方々がどのように島を楽しむかという視点で見えており、楽しそうに話をしていたのでここからもっと粟島の事を知ってほしいと感じた。

③高橋咲紀

私は、主に参加して下さったみなさまとディスカッションをさせていただきました。発表の時点から、粟島がどのような所なのか興味深く聞いていらっしゃる方ばかりで、一泊二日のグループごとにツアープランを考える際にも積極的にたくさんの意見を出していただきました。使用したカード以外にも違った活動ができるのではないかなど、学生では思いつかないような活動もあげてくださったので、今後の我々の活動の参考にもなる良い時間を過ごすことができました。また、印象深かったことは、同じ班でディスカッションをしていた女性の方が、「こんなにもできることがあると一泊二日ではもったいないね」とおっしゃっていたことです。この言葉を聞いて、粟島には夏の海水浴や釣り以外にも楽しめることがあるということ、都市部の方に少しでも伝えられたのではないかと非常に強く感じました。

(5) イベント総括と今後の課題

都市部でのPRという点において概ね成功と言える結果となった。集客に関しても、粟島浦村の皆様をはじめ、多くの方々のご協力により、当初予定の20席を超え30名近い方々にご参加いただき、満席とすることができた。内容に関しても、比較的好意的な意見が多く粟島の魅力を伝えることができる内容であったと考える。

課題として、進行に乱れが生じた個所が数か所あったことや料理との兼ね合いもあり終了時間が押してしまったこと、不測の事態への対応の遅れ等が挙げられる。今後に向け会場をコントロールすることが難しくなった場合の対処法を考える必要がある。

5. 事業結果の考察

(1) お手伝いプログラムの事業化と活用可能性

本事業の結果、次のことが明らかになった。

1) 島外者におけるプログラム可能性について

試行実践の結果、「お手伝いプログラム」の取組は、島外者でも行うことが可能だということが明らかになった。新たにイベントやプログラムを構築するというのではなく、既存の島の日常的な暮らしを題材にしている本活動は、島民の営みの一部に島外者が参加可能か（つまりお手伝い可能か）どうか最初の条件となる。前章で確認したように今回プログラム試行実践に参加したモニター学生の動向をみると、里山（竹林）、農業（畑）、食、さらに工芸品づくり（てご編み）や集落行事など、最初の取り掛かりに戸惑う場面は見られるものの、すべての試行実践において当初予定の活動をやり遂げていることから、事業化を十分に検討できると考えられる。

2) 島民（おじいちゃん・おばあちゃん）におけるプログラム可能性について

島民（おじいちゃん・おばあちゃん）にとって本プログラムは、人手不足や知恵・技術の継承という点でメリットがあることが実施のための条件であると考えられる。今回の試行実践の結果、人手不足の解消（つまりお手伝い）という点では、十分な効果が見込めるかどうか不透明なプログラムもあることが分かった。また、島の営みに不案内な島外者を受け入れるにあたって、むしろその準備や説明のために負担が増してしまう可能性があることも明らかになった。

3) プログラムの事業化のために

プログラムの本来目的である人手不足や知恵・技術継承といった効果を高めるための、具体的なモデルプログラム、事前教材や手引書、島外者とおじいちゃんおばあちゃんをつなぎプログラムを運営するコーディネート体制が必要である。このため、本年度試行実践を行った里山（竹林）、農業（畑）、郷土料理について、補助教材の試案を作成した。報告書末の資料編に掲載した。

4) プログラムの波及効果と活用可能性

島外者にとって、お手伝いプログラムは、単なる手伝いのみならず、島の暮らしや生活の営みについて理解を深める学びの要素が大きいことが明らかになった。プログラムを通じて、島民とのコミュニケーションや、島の営みの実物に触れることや「お手伝い」という島へ寄与している感覚がもたらす楽しさや喜びが得られることがわかる。こうしたお手伝いによる島への貢献だけでなく、むしろ島外者が享受できる島から学びといった効果が着目される。これは首都圏での発信活動においても実感されたことでもある。

一方で島民（おじいちゃん・おばあちゃん）にとっては、本プログラムを行うことによって、自分たちの日常的な営みに新たな光を当てることにつながる。それは島外者の目線の違いを利用して、自分たちがこれまで受け継ぎ育んできた知

恵や技術を再評価・再発見していくこと、そのことによりこれまでの人生を統合し、彼らにとっても英知を得る効果をもたらす可能性があると考えられる。¹

本プログラムは、単なる島の環境や生業の保全継承といった機能にとどまらない効果があるといえよう。今後、こうしたプログラム試行実施の中で垣間見られた「島の教育力」（島民・島外者双方にとって学びを促進する力）の波及効果や活用可能性をさらに検討していく価値があると考えられる。

（２）参加学生から - 試行実践モニターとしての感想を中心に -

以下に、「お手伝いプログラム」試行実践のモニターとしての役割も担った参加学生からの所感を次に紹介したい。

1) 学んだこと一島の魅力と島の生きてきた人々ー

9月上旬に実施された最も長期にわたった第2回目試行研究は感慨深い。滞在していた8日間、粟島は夏から秋へ景色を変えた。海の魅せる顔や空の高さ、吹き抜ける風によって、小さな変化が大きな実感を生む。四季をここまで強く感じたのは20年生きていてはじめてだった。粟島にいと自然だけではなく、多くの変化に気付くようになる。島に暮らしている人々のやさしい眼差しを感じるからだろうか。自分自身を省みることや他者の良さ、クセに気付くことが増えた。出川先生の主張していた過疎地域の農山村の魅力的なコミュニティやチカラとは、個人にそのスポットが当てられていることなのかもしれない。また、そのスポットが自分にもあてられるということなのかもしれない。

2) プログラムがもたらす効用一島の魅力と島の生きてきた人々に触れるー

『俺がいまマリオなんだよ』島に来て子はゲームに触れなくなりぬ」俵万智という短歌がある。粟島は、暮らしやすさや派手な楽しさとは程遠い。でも、ここで生きている人々はみんなが主人公で、きらきらしている。ナタの使い方もかぼちゃの切り方も知らなかった私も“何も知らない私を知る”ことでどんどんきらきらしていく。普段、家と駅の往復しかしない私が空いている時間があれば散歩に出かけ、道行く人に声を掛けられたり声をかけたりする。粟島に来て、自己肯定感の形成のプロセスや自尊心の重要性を知ることができた。

3) 新たな課題一島の子ども達とのかかわりからー

¹ 高齢期の学習特性に関連してエリクソンは「個人が高齢期に遭遇する様々の危機に直面し自らの課題を解決する過程は、同時にその姿を見ている若い世代をも育て、将来彼らが高齢期を生きるうえでのよきモデルとなると指摘」（鈴木真理他2014「生涯学習概論」p.85）している。

実は、地元学の際に大学生メンバーがかかわった中にはあまり楽しそうではなかった島の子ども達がいたことに気づかされた。これは粟島に限らず私たちが出会う各地の地方地域の若者たちや子ども達に共通する側面でもある。しかしある子どもが島の魅力が理解できず、不便さを嘆いているばかりだったことが印象に残っている。ことによると彼らのおかれた環境〈しおかぜ留学が大多数〉も影響して、プログラムに対し拒絶感や強制感を感じるということがあるのかもしれない。私自身も島内者に「何しに来たの?」という質問を投げかけられることも多くあった。島内者にとっては、島外者が島を訪れてくれることを好意的に思っている反面、様々な不便さやギャップ、違和感を抱いていることに気が付いた。本来であれば、しおかぜ留学により島を訪れた島外出身の子どもたちが島を知り、島の資源を活用し、学んでいくなかで島内者や粟島にとっても新たな学びが生まれる状況が創造できると思う。しかしプログラムに固執して学ばせるという構造は互いの亀裂を生じさせがちな側面も併せ持っている。

子どもの会話の中では、「キャンプをしたことがない」という話があった。島にとって必要なのは、子どもたちと島内者の相互的で好意的な関係性であり、そこをなくしては今後の島外者とのプログラムでの有益な交流は見掛け倒しに終わってしまうのではないかと思った。そして子どもたちにとっていま本当に必要なのは、島の人にとっては普通の「粟島暮らし」や「粟島での思い出」であり、粟島に対する素直な尊敬と素敵な体験の一つ一つだと感じている。

4) 島に根差した学びの必要性—島の高齢者の子ども時代の話から考える—

島で店を営むあるおばあちゃんとのエピソードを紹介したい。彼女は生まれも育ちも粟島で、粟島の背景や歴史をよく知っていた。貧乏だったこと、島民たちが標準語を学ぶ過程、島の小学校のことなど幼少期について特に教えてくれた。山越えをする通学に一日の大半がとられ、家事をお手伝いしたり畑仕事を手伝ったりするなかで、忙しく自分の時間というものが少なかったそう。けれど、近所の子たちと道端で遊んだことやおにぎりをつくって海を見ながら食べたこと、男の子が木登りして食べ物をとってくれたことなどが印象深いと笑顔で話してくれた。

また、釜谷で散歩をしていると漁師になりたてというおじいちゃんたちが、秘密基地の話をしてくれた。「秘密基地は秘密だからいいんだよ。詳しいことは教えてあげない」と軽い冗談を交えながら懐かしそうに話してくれた。島には、大人にばれないような素敵な隠れ場所がたくさんあり、海に流れ着く宝物や流木を使っていたのかもしれない。

島という独特な自然環境の中で、おばあちゃんやおじいちゃんたちは、より楽しむために様々な努力や体験をおこなっていた。

5) お手伝いプログラムを基盤とした新たな展開を

島という独特な自然環境の中で、お手伝いプログラムのおばあちゃんやおじいちゃんたちは、より楽しむために様々な努力や体験をおこなっていた。子どもたちに20歳の私が聞いても面白そうだなと感じる「みんなでわいわいにご飯をつくって外で食べる」や「大人が関与しない空間を自分たちで作る〈基地〉」を島の子どもと行ってみたいと思った。学びが先に来るのではなく、遊ぶことに学びが含まれている。そのような形で島の子どもたちとおじいちゃん・おばあちゃんをつなぐことができる仕組みを考えられないだろうか。

Ⅲ. 総括と提案 - お手伝いプログラムを軸とする多世代協働コミュニティ創出 -

大正大学出川真也研究室（地域創生学部・社会教育・生涯学習論担当研究室）では、平成 27-28 年度にかけて本事業に取り組んできた。

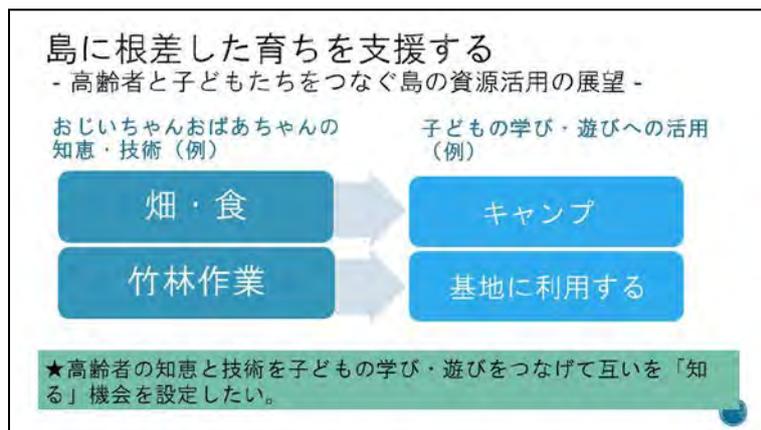
27 年度は、私たち島外者が関心を持って島民と取り組めるものとして里山（竹林）、畑、食文化、伝統行事や共同作業等を掲げた「あわしま おじいちゃん・おばあちゃんのお手伝いプログラム」（以下「お手伝いプログラム」別添資料参照）を構想した。28 年度はこのプログラム試行実践するとともに、首都圏での発信活動を行う中で、高齢者の担う知恵や技術を生かした活動には、周りの学習を促進する魅力があることが明らかになった。一方で、島の子どもたちは島の自然・文化に対する関心が必ずしも高くなく、島の良さや島に根差した知恵・習慣を知らない面があることに気づかされることとなった。

以上から、今後は、子ども達をはじめとした若手島民が、高齢者が受け継いできた島の自然・文化の魅力と価値を再認識できる具体的な取り組みや環境づくりが必要だと考えられる。粟島浦村では「島民による粟島創生戦略」（H28.3）において「島の子どもが先輩と遊び、学べる機会づくり」を掲げている。今後の「お手伝いプログラム」を真に島の地域作りに以下していくために以下の取り組みを提案したい。

1. 提案概要—粟島の高齢者と子ども達をつなぐ学習プログラムの構築と実践—

（1）子どもたちが活用できる島の高齢者の知恵・技術の発掘調査

高齢者や子どもたちと協力して、島の高齢者が担う自然・文化・歴史的資源の調査を行い、子どもたちが関心を持って活用できるような方策を検討。検討結果を「島の高齢者と子どもたちをつなぐ学習プログラム」として整備する。



（2）「島の高齢者と子どもたちをつなぐ学習プログラム」の実践

「島の高齢者と子どもたちをつなぐ学習プログラム」を実施する。実施に当たって、「お手伝いプログラム」の知見を活用していく。

(3) 島内の若手組織を軸とする多世代協働のしくみ作り検討会の開催

調査やプログラム運営を通じて高齢者と子どもたちの絆を形成するとともに、運営面で若者が取り組みに関われる仕組みを検討する。島内の若者組織と意見交換を行いながら、島の子どもたち、高齢者組織、若者組織、都市部等島外の若者組織（大正大学の地域創生学関連の学生研究会ほか）がネットワークを組んだ持続可能な協働体制を構築していく。

2. 実施方針

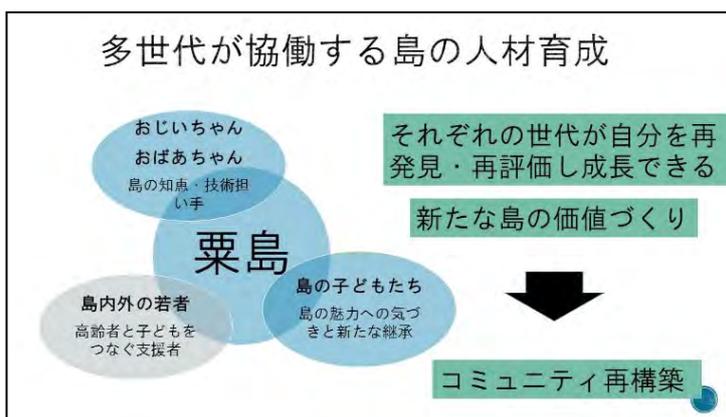
事業の実施に当たっては関係する島民のニーズに寄り添いながら、協働して取り組むとともに、島内外の若手世代層を巻き込んで継続的に事業実施できる仕組みを構築することが必要。以下の3点が実施方針として考えられる。

- ① 高齢者・子どもたちのニーズ把握に努め、寄り添う姿勢
- ② 高齢者・子どもたちとの協働による事業実施
- ③ 島内外の若者組織の参画促進と活動の継続性の確保

3. 期待される効果

島内の高齢者が担ってきた知恵や技術に対する子どもたちの関心が高まるとともに、現状では高齢化や人手不足のために継承が危ぶまれている島内資源の保全活用が促進されることが期待される。このことは現在島ぐるみで取り組んでいる離島留学制度の教育効果をさらに向上させたり、子ども・高齢者・若者の協働やコミュニティ意識の醸成を促すものと考えられる。

これらは村が「島民による粟島創生戦略」で掲げている「新たなコミュニティ～多様性を前提としたコミュニティの再構築」「島の子どもが先輩と遊び、学べる機会づくり」の実現につながるものと考えられる。



多様な世代の協働による人材育成とコミュニティの再構築

4. おわりに

以上の提案を本事業の総括にかえさせていただくと共に、私たちと島の皆さんとの今後の研究・実践課題としていければと願っている。

これまで2年間にわたって共に取組むことができた島の皆さん、首都圏の協力者の皆さんに感謝したい。

参考文献

「あわしまガイドブック 2016」 粟島観光協会 2016

「神秘郷・粟島 今は昔・・・明治後半期と昭和初期の島の姿」 粟島浦村教育委員会 1994

「粟島風土記」 粟島浦村教育委員会 1991

「新編粟島今昔物語」 粟島浦村役場教育委員会

安藤潔「越後粟島わらべ唄」 粟島浦村教育委員会 1999

安藤潔「越後粟島の方言」 粟島浦村教育委員会 1997

鈴木真理他「生涯学習概論」 樹村房 2014

